
目指すはハーレムエンド

鷹崎 弘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目指すはハーレムエンド

【Nコード】

N9771Z

【作者名】

鷹崎 弘

【あらすじ】

世界最高峰の企業、鳳凰院グループ。企業は数十人の人々を集めた。理由は一つ。鳳凰院グループのトップとなるものを見つけるため。

その条件は親友以上、または恋人以上となる者を作りまくれ！
と言っことだった。

和泉優太は、そんな中目指す。

ハーレムエンドを。

プロローグ

大きな一室に何十人も人間がなぜか同じ仮面を付けて呆然と立っていた。

その何かの会場の様な部屋は電気を切っているために、はっきりとお互いの顔が見えないのだが、体つきを見るかぎり男と女が約四対六の比でいるようだ。

辺りがざわざわしている中、突然、舞台のような他よりはいくらか床が高い場所にスポットライトが当てられた。

「レディース・アード・ジェントルマン！」

それにオッサンもオバサンもガキンちよも、こゝんちくには。

私は世界最高峰と呼ばれている企業、鳳凰院ほうおういんグループの単なる平社員へいしゃいんの、片代伸吾かたしろしんごと申します。

本日はこの場の司会を任されております。

どうぞよろしくお願い致します」

そうふざけた態度で登場してきたその男性は、黒いスーツ姿に黒の短髪、糸目が特徴的であった。

片代は、周りが更に騒つく中、上辺だけの笑顔をかざして話を続ける。

「皆さん、お静かに。

黙らないと鳳凰院グループの力であなた方の人生メチャクチャにしますよ？」

片代は馬鹿にしている様に言うが、実際に鳳凰院グループの力を持ってすれば、そんなこと等容易くできることは今の時代、子供でも知っている。

だが、

「ふざけんじゃねえぞっ!!」

こちらら、いきなりこんな場所に連れてこられたんだ! 平社員
なんかお呼びじゃねえんだよっ! もっと上のヤツ連れてこいや!

!」

と前方から若く、荒々しい声が部屋に響いた。

どこにでもこういった輩やからがいるのも確かな事実である。

しかし、そこで

バチッ!!

「がっ!!」

そんな音が聞こえた。

そのせいで、辺りが静まり、そんな中、片代は再び口を開いた。

「ありがとうございます。ようやく静かになりましたね。

さて、では本題に入りましょう」

片代は何もなかったかの様に上辺だけの笑顔を振りかざしている。
そのことが余計に人々を恐がらせる。

「まずですね。

鳳凰院グループのトップになりたい人は手を挙げましょう!」

この部屋にいるほとんどの人の頭の中にはクエスチョンマークが
浮かんでいた。

何でそんなことを聞くのか、と。

「…皆様、なりたくないと言うことでよろしいでしょうか?」

片代が問い掛けると、一人、二人と手を挙げ、それが開始の合図となったかの様に最終的には、おそらく八割以上の人々が手を挙げていたのだろう。

「では、なりたくない方々はご帰宅していただいて結構です。

一番後ろの扉から出てくだされば、社員が皆様を家までお送り致します

「さよなら」

そして、片代は笑って何名かを送り出した。

「さて、皆様は突然ここに呼ばれて訳ですが、これからある試験を受けてもらいます」

再度、どよめいた空気になる。

「皆様、お静かに」

今度は一瞬でピタリと部屋から言葉が消えた。

「ありがとうございます。これから説明をしようと思いますが、長々となることをご了承ください」

誰も喋らない。

口を開くのは片代ただ一人。

「まず、皆様には『天城市』あまぎと言う土地に引っ越していただけます。理由としてはそこが鳳凰院グループが一番干渉しやすい土地であるからでございます。

仕事や学校、家庭といった事はこちらでいくらでも援助致しますので、ご安心を。

次に何をするか、ということですが、皆様方には一年間、より多くの人々と交友を深めていただきたいのです。

何が言いたいのかわからない人がほとんどですよ？

代々鳳凰院家の当主、グループのトップになるための条件は人身掌握の術が誰よりも長けていることです。

オブラートに包んだ表現をするなら最高のカリスマ性を必要とする、と言ったところででしょうか。

知識は後からでも身につきます。鳳凰院グループなら無理矢理にでも植え付けられます。

ですが、カリスマ性は多少の成長があっても、先天的な部分が大きいのです。

それゆえに、この試験を受けていただきます。

それではルールの説明をいたします」

そこで片代は、一旦言葉を切った。

ただ、話し続けていたため、息を整えようとしたのだろうが、その静寂が他の受験者とも呼ぶべき人々をより緊張させる。

「まず、交友を深めると言ってもどの程度深ければよいのか、についてです。

同姓なら親友以上。異性なら恋人以上になります。

言い忘れていましたが、これは得点制です。

親友の、恋人のスペックが高ければ、高い程の高得点になります。判定はこちらで公平に行います。

何をもって公平に？

と言いますと、我々がその親友なり、恋人なりの過去と現在を全て洗いざらい調べ尽くすことをもって、公平と言わしていただきます

す。

人数は何人でも可でございます。

親友だろうが、恋人だろうが。

また、恋人以上に限った話なのですが、他人から奪ったら二倍の得点となります。

ルールはその程度…と、申し訳ありません。また一つ言い忘れていました。

それはですね、その時点で獲得しているポイントを使って、我々鳳凰院グループの援助を要請することができる、と言うことです。

物資であろうとも、人を使つての調査だろうとも可能です。

そして、最終的に得点が一番高い人が見事、鳳凰院グループのトップです。

これまでで何か質問はございませんか？

分かりきつた質問は『排除』させていただきますが」

多くの者がその『排除』と言う言葉が何を意味しているのかが分からない…いや、僅かに分かつてしまうから、受験資格の剥奪であろう、と思つてしまい、聞きたいことは山ほどあるけれど質問をしない。

その中に、一人、いや二人、男と女が一人ずつ、高々と手を挙げた者がいた。

「はい。まずはその貴方。どうぞ」

と、片代は女の方に向けて言う。

「ど、どうして私たちが選ばれたのですか？」

女は若い声ではあるが緊張でガチガチとなった声を振り絞り、周りの皆が思っていることを尋ねた。

「ああ、また伝え忘れていました。忘れっぽくて申し訳ありません」

片代は謝るものの、口調はふざけた、軽いものだった。

「それは鳳凰院グループ現当主が重い病やまいを患ってしまったのですが、現当主には世継ぎがいなかったため、鳳凰院家初代当主の血を引く皆様、六人去ったので、二十八名の中から適格者を見つけだし、継がせようと言うことになったからでございます」

受験者は皆驚いている。

自分達が鳳凰院の血を引いていると言うことについてだ。

「まったく、今時血がどうこう、と古臭いのですが、それで世界最高峰と呼ばれるまでに成長したのですから文句は言えないのですかね。」

あ、私文句言いましたね。これは失礼。

では、そちらの貴方もどうぞ

片代は言った。

男は楽しい口調で質問する。

「それって、堂々とハーレム目指していいんですよね？」

『……………』

誰もが声を出さない。

受験者達はこの雰囲気の中、笑って、馬鹿にしても良いものなのか、と。

片代は…よく分からない。

初めは呆れているだけかと思われたが違った。

なぜなら

「ぶっ、はははははははっ！！！！」

大爆笑していた。

「いい！ 貴方がいいですよ！！ 非常に面白い。まさかこんな質問がくるとは思いもありませんでしたよ。ええ、ええ、結構です。存分にハーレムを目指して下さい」

片代が笑っても受験者達は笑えない。

反応に困っている。

「ふうー。いや、笑いました。

他に質問のある方はいませんか？

………いないようなら、これにて終わりとします。

最後に、皆様、法律は守りましょうね。

それでは」

そう言い終えると、片代は防護マスクの様なものを装着する。

と同時に白い煙がどこからともなく部屋に充満し始め、受験者達は部屋に悲鳴を響かせていた。

「それでは、皆様、良い夢を」

試験開始直前

俺こと、和泉優太いずみゆうたは見知らぬ部屋の、見知らぬベットの^{いす}上で枕元に置いてあった目覚まし時計によって目を覚ました。時刻表ちよつど午前五時。

「……ふむ、昨日のは夢ではない、と」

俺は昨日の回想を軽くする。

昨日は学校から帰っていると、いきなり黒服の大男達に拉致られちった。

まあ、おもしろそうな一年にしてもらえるっばいからいいんだけどな。

はい、終わり。

そつだ。ここが天城市つてところなんだよな？

そつ思いながら、俺は窓の外を眺める。

高っ！！

ここはマンションの一室だったらしい。それもかなり高い階層の。

この窓から見て目立つ建物は二つ。

一つは鳳凰院グループの本社。

バカでけえ、の一言に尽きる建物だ。

鳳凰院グループとは漁業、農業、医療、重工業、軽工業関連等、数知れない部門で世界のトップに立ち、また、日本の議員の約三割は鳳凰院グループと繋がりを持っていると言われている。

日本は実質上、鳳凰院グループが治めている、との噂も流れている程の企業だ。

話は戻るが、もう一つの建物は白代学園^{はくしろがくえん}。

そこは、中学から大学までエスカレーター式になっており、さらに今の日本で一番学生数（中学、高校、大学のそれぞれ）が多い学校。

ちなみに学力は国内だけで見ると、上の下から中と言ったところである。

そして、俺は窓から離れ、部屋の中にある机を見る。

その上には一通の置き手紙があった。

俺はそれを開き、そして目を通す。

内容はこうだ。

『まず、このような非礼をお詫び申し上げます。

と、堅ってくるしく言わなきゃダメなんだけどいいよね？

はい、どうも片代です。

昨日からずっと君のことが気になって（笑）。

質問のことだよ。変な勘違いをしないでね。

じゃあ早速でだけど、いくつか説明があるんだ。

一つ目に、同封している見取り図はこの部屋のものだよ。1LD
Kの快適な部屋だね。

もう一つと同封している地図は、この天城市周辺のもの。赤く塗
られているのが、君の部屋』

うむ、悪くない場所なんだが、こいつフレンドリーすぎじゃない
か？

『また、君は今日から白代学園高等部に編入してもらつよ。

関連書類は全て学校に送っているから大丈夫。後は到着後、職員
室に向かつてくれればOK』

…なんかイラツとするな…

てか、俺の学力だと白代は厳しいんだけど…

『お金の方は、君は食費だけ気にしといて
学費や光熱費、電気代とか諸々は、こっちが受け持つから安心し
て。

ちなみに、一ヶ月に五万円の支給されるから』

一ヶ月に食費が五万円か。

かなりの金額を遊びに使えるな。

『他に服とかは持って来てあげたよ。全部玄関にある段ボールの中

だから。

あ、白代の制服だけはクローゼットの中にあるよ。
それと、試験資格は十二歳から三十九歳のため、四十三の君の父親と四十一歳の母親は試験は受けられないんだけど、君の一人暮らしは許してくれたよ。

その際に言伝を預かってるんだ。言うよ。

「優太、父さん達を楽させてくれよ」、「優ちゃん。隠し場所って大切よね」だって」

…父さんは、適当だけど一応は応援してくれてるんだろうが……
母さんは何が言いたいんだ？

『最後に一言。』

君の性癖は私には分かりかねます』

………バ、バツキャロー………!!

こいつ俺の秘蔵コレクションを見たんだな？ 見たんだよな！？
見てしまったんだな!!？

何してんだよ!!

そうか！

母さんが言ってた「隠し場所」ってのはこの……？
待てよ。母さんが知ってるってことは……

……み、見られた……!!

ヤバイ！ ヤバイぞ！ これは非常にヤバイ!!
もう本当に顔が合わせられないぞ……

と俺が嘆いていると、手紙の一番下にまだ何か書いてあったのが見えた。

俺は萎^なえた心で一応見てみる。

『追伸

君のお母様のご要望により、それらの雑誌は全て処分しました（笑）』

（笑）じゃねえ—————!!!!!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9771z/>

目指すはハーレムエンド

2011年12月31日01時50分発行